

1. 川崎市の学童疎開は・・・

1944年（昭和19年）、戦争が激しくなった頃、重要な工業地帯である川崎も空襲を受けるようになりました。工場その他、次第に町のいたる所に爆弾が落とされるようになりました。

そこで、川崎市では将来のある子どもたちの命を守ろうという国の考えを受けて、35校あった国民学校のうち24校の3年生から6年生まで、7,000人あまりの子どもたちや先生を集団疎開させることにしました。行き先は、川崎市の北部（多摩区・麻生区）や、神奈川県中央部でしたが、一番多くの子どもたちが疎開したのは大山町でした。

家族に送られて遠足に出かけるような気分での出発した子どもたちも、そのうち無口になり、寂しさで泣く子もたくさんいました。

疎開が始まる

1944年（昭和19年）の夏、国の考えを受けて、東京だけでなく神奈川県でも大都市である川崎・横浜・横須賀の三市で学童を疎開させることが決められました。

川崎市では171ヶ所にわかれて学童疎開が行われました。大山が疎開の場所選ばれたのは、緑が多き山なので安全であること、子どもを受け入れられる施設がたくさんあることからでした。

川崎の子どもたちの学童疎開先											
川崎市北西部	・	・	大島	・	桜本	・	小田	・	渡田		
大山（中郡）	・	・	住吉	・	大師	・	御幸	・	宮前	・	玉川
			旭町	・	富士見	・	向	・	平間		
中郡その他	・	・	南河原	・	日吉	・	田島	・	幸町	・	川崎
			川中島	・	前沼	・	新町	・	高津		
津久井郡	・	・	中原	・	大戸	・	(日吉)				

※前沼小は現在ありません。

[母の心]

荷物を入れる箱や机代わりにした木のみかんの箱に、ひとつひとつ名前を書いた子どもの持ち物が収められていました。疎開先での子どもの生活を思い浮かべながら、墨をすり、筆をにぎって丹念に書かれた名前でした。柳ごおりの中には、衣類などをていねいに入れました。それが、まだ幼い子どもを、どんな場所かよくわからない土地に送り出す親たちがしてやれるせいっぱいのことでした。



学童疎開の生活

[たきぎとり]

疎開先の燃料はすべてたきぎでした。そこで全員があちこちの山にかけて、たきぎを集めました。始めのうちは近くでしたが、だんだん拾いつくしてしまい、遠くまででけなければならなくなりました。

冬の杉林の中は非常に暗くて寒く、霜が凍ったままで落ち葉や枯れ枝をひきぬくというような強い力が必要でした。しもやけではれあがった手

がじんじんと痛みました。集めた落ち葉や枯れ枝を小さな背にくくりつけ、肩にめりこむ重さにたえて山道を歩きました。杖をつき、足をひきずりながらも、自分たちで燃料を確保しなければなりませんでした。



疎開に出発する子どもを見送る人のごったがえす校庭

[先生の思い]

疎開先へ何度も足を運んで打ち合わせをする先生、何十人もの食事を一度に作るための鍋・釜、蚊帳など生活に必要な道具を集めにまわる先生もいました。引率の先生も家族を川崎に残していることが多く、幼い子どもや年をとった家族をおいていくことの不安は先生も同じでした。しかし、それ以上に、親からあずかった大切な子どもたちと24時間生活を共にし、安全で健康に過ごさせることのむずかしさや責任の大きさを感じていました。

[農家の手伝い]

「お昼によう、白米のおにぎり五つも食べちゃった。」

「さつまいもも配給のいもなんかと、てんでちがわあ。うまかったなあ。」

農家の手伝いは、最初は力のありそうな子が選ばれていましたが、仕事の後何か食べさせてくれることが分かると、皆が行きたがりました。

子どもたちは、麦ふみ、田植え、稲刈り、芋掘り、らっかせい掘りなど一生懸命働きました。のこぎり鎌で小指の爪をまっぴたつに切りこんでしまったり、ぶよに足を刺されて歩けなくなるほど化膿してしまったり、草の葉で手を切ったりするのはごく普通のことでした。それでも食べ物につられて一生懸命働きました。



畑で野菜を収穫

➤ 疎開地にも突然飛行機が . . .

1945年（昭和20年）5月19日のことでした。

この日はすでに警戒警報は出されていました。しかし、このころになると、警報はいつも発令されているような状況なので、警報に対しては一般に鈍感でした。

ドカーン！！

算数の授業を受けていた子どもたちは、それまで聞いたことがないような大きな音とともに、山や地面がぴりぴりとゆれるのを感じました。と同時に「ふせろ」という先生のさけび声で、とっさに開いてあった本やノートを頭にのせ、机の下にもぐりこみました。しばらくしてこわごわ顔を上げると、窓のさんは折れ、窓ガラスはこなごなに飛び散っていました。もぐったつもりの机も半分以上はひっくり返っていて、学用品が床に乱れ飛んでいました。子どもたちはしばらく呆然とたちつくしていました。

同じ頃、山へたきぎをとりに行っていた子どもたちもいました。たきぎを束ね始めたとき、聞き慣れた飛行機のにぶい爆音が空からひびいてきました。空に雲がかかり、機体は見えませんでした。

「心配することはない。まさか山うさぎや小鳥を殺すのに爆弾はつかわないだろう。」などと冗談を言いながら、皆安心して作業をつづけていました。

しばらくすると、物をさくようなビリビリッという音、あるいは山が崩れ落ち

るようなザザザッという異様な音がしました。

「あぶない、逃げろ！」

子どもたちは、すでに聞きなれない音に危険を感じとっていました。山の斜面を滑り落ちたり、わずかなくぼ地に身をふせたり、がむしゃらに地面にへばりついたりしていました。どの子どもも必死でした。じっと身をひそめたまま、長いとも、短いともつかない緊張した時間が流れました。

次の瞬間、山全体を破壊するようなごう音があたりにひびきわたったかと思うと、夕立の前のように目の前が暗くなるような感じがしました。爆弾が落とされたのでした。

やがて飛行機の爆音は北の空に消え、何事もなかったかのように、足元の雑草が風にゆらいでいました。

斜面に散らばっていた子どもたちは少しずつ動き出し、やがてものすごい速さで先生のまわりをかけよりました。顔に泥がついたまま、唇をがたがたふるわせて、お互いの手をにぎりあっていました。

この時、爆弾は7発落とされましたが、たまたまそのうちの一発が寮のうらを流れている川の向こう側に落ちました。細い道と川に沿って弾片と爆風が数百メートルにわたって飛びました。その弾片が、旭町国民学校5年生の米須清博君をおそいました。不幸にも一片が彼の後頭部をえぐり取り、もう一片はももの付けねにささりました。即死の状態でした。

安全と思っていた疎開先でこのような犠牲は、まわりの人たちにとって大きな衝撃をあたえました。

学童疎開の思い出

[待ち遠しい面会日]

伊藤 朝光

昭和19年の夏だったと思います。わたしたち3年生から6年生までが疎開を命じられ、父母の故郷のあるものは縁故疎開、その他の大部分のものは大山へ集団疎開をさせられました。わたしも当然集団疎開組みです。父母兄弟と別れ、南武線平間駅より、小田急線伊勢原駅、そして大山まで行きました。今では東名高速道路を使えば1時間足らずでいくことができますが、当時はすいぶん遠く感じました。大山には川崎市内9校の国民学校（現在の小学校）が疎開をし、われわれの玉川国民学校は大山のちょうど中ほどで、上に行くにも、下に行くにも、とても便利なところでした。

大山での学習は、裁縫机でほとんど午前中が学習、そして午後が食料品の配給

受け取りと薪拾いで費やされました。毎日のようにじゃがいもの代用品をたべさせられたので、今ではじゃがいもを見るのも嫌で当然食べる気もしません。いつもおなかが空いていて、食べ物の事以外頭の中に浮かばない程です。

ある日のこと、にわとり小屋に蛇が入り、みんなで捕まえて、薪を燃やして食べたことは、忘れることができません。連日連夜ノミとシラミにおそわれ、やせこけた手足の血を吸われ、その果てに寝巻きややシャツはノミとシラミの糞で真っ黒になり、当時は特効薬もなく、大きななべに下着類を入れて煮沸するのがまた一仕事でした。

この疎開生活で、一番待ち遠しく嬉しい日は、親や兄との面会日です。食べ物や着替えを持ってきてくれる日です。つもる話もありましたが、言葉が見つからず、その分毎日のように手紙を書きました。内容は、今度の面会日にはポツトラ焼きとかその他最初から最後まで食べ物の名前ばかりです。あのひもじさに耐えた疎開生活は、今の豊かな物資に恵まれた子どもたちには想像もつかないことだろうと思います。

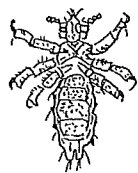
8月15日の終戦を迎え、長い間お世話になった大山とも別れ、玉川国民学校に帰ってきました。その時いただいた証書を見ると、卒業証書ではなく修了証書なのです。私たち同級生はまだ、玉川小学校を卒業したことになっていないのです。学校には立派な体育館もできたので、この立派な体育館で改めて卒業ができるよう学校にもお願いし、その念願が果たせるように今同級生で話がもちあがっています。

(当時5年生)

追伸:その後、昭和61年3月22日に卒業式は実現した事を伺いました。



先生に髪を洗ってもらう



ノミ



シラミ

「思い出」

野口 多門

昭和19年8月、わたしたちは集団疎開を見送る母親の涙も理解できないほどあどけない8歳の玉川国民学校3年生であった。当時の思い出はたくさんあるが、その中で特に印象的なものを各書く。

それは昭和19年5月19日のことである。三村寮で我々男子20人程は、修身の授業中であった。空襲警報のサイレンがなると間もなく、突然耳をつんざくよ

うな爆弾の音がおこり、ものすごい爆風とともに、爆弾の大小の破片が部屋をおそった。窓ガラスは全部吹き飛び、壁ははがれ飛び散った。この突発的な一大衝撃にみんな肝を冷やし、一目散に裏山に逃げ込んだ。大野もと子先生を中心にひとかたまりになって、かろうじて木陰に隠れることができた。空には B29 が舞っていた。もっと安全な場所に避難したかった。誰かが泣き出しそうな声で言った。「先生、もしここにも爆弾が落ちたらどうするんですか。もっと安全なところに逃げよう！」誰も考えていることは同じだった。一瞬みんな緊張して先生の言葉を待った。

若い女教師大野先生は責任感と恐怖感でふるえる声で「みんなここで死にましよう」と言ったこの一言でみんなの心の動揺はおさまり、その場に身を伏した。

しばらくして B29 の影は消え、私たちは山から下りた。寮の玄関に被爆して亡くなった近所の婦人が警防団の人たちによって運ばれてきた。部屋に入ると、そこは足の踏み場もないほど爆風であらされ、あちこちに爆弾の破片がつきささっていた。部屋の中央にある柱には破片が通過して丸い穴を開けていた。そのものすごさに驚きながらみんなでその柱の穴にさわり、無事でよかったと奇跡的な無事を喜びあった。

8月15日、私たちは目黒寮に集合してラジオの重大放送を聞いた。その放送は難解な言葉ばかりで3年生の我々には理解できる内容ではなかった。その内、先生方の表情が尋常でないことがわかってきた。肩を落とし、下を見つめ泣いている先生もいた。その雰囲気から何か大変なことが起こったのだと子どもながらに感じていた。放送が終わり、山崎先生が解説された。「戦争は終わった。早く言えば負けたのだ。」その声は力なくうるんでいた。

□

(疎開終了時4年生)

ある学童疎開の記録

[米須清博君の霊に捧ぐ] 綿引(現:大山)正幸

太平洋戦争も昭和19(1944)年になると、わが国は末期的症状を呈するに至った。

私は、そのころ川崎市旭町国民学校の訓導であり、猛暑の8月21日、熊坂菊治分団長ほか10名の職員と、若干の寮母、作業員ともども360名の学童を引率、大山へ疎開した。そして大藤・佐藤・大木・小林・亀井・二階堂・吉川・丸山の8宿舎に分宿、翌年の10月、終戦による疎開解散になるまで、ここで疎開生活を子どもたちと送った。

事件は、昭和20(1945)年5月19日に起こった。このころは「9」のつく

日に米の配給があり、連絡があると、上学生が授業中といえどもリュックをかついで諏訪坂上の「石井」という米屋まで取りに下っていったものである。

午前10時過ぎ、「米の配給、5年男子」という連絡があって、5年男子の教室に当てられていた吉川寮の子どもたちが、各宿舎に戻ってリュックを取り、いっせいに山を下っていった。引率担任はA訓導。やがて昼になり、午後の授業も終わって、各宿舎から子どもたちが帰ってきた。私の大藤寮では、6年女子に手伝わせて、昼食の膳を並べていた。すでに警戒警報は出されていた。もっとも警報はこのころになると、いつも発令されているような状況であったが、ここ大山町ではかりに空襲警報になっても、別に避難する必要もないという町当局の話から、警報に対しては一般に鈍感であったといえる。

子どもたちと一緒に膳を並べていると、かすかに爆音が聞こえてきた。警報には鈍感であっても、やはり戦時下、爆音には鈍感であったと見えて、「飛行機が近づいてくるよ。注意しろよ。」そんなひとり言めいたことを言った時、その音はザーツという小砂利をまいた音に変化した。瞬間、「ばくだんだ！伏せろ！」という私の声で、子どもたちは声をあげて畳に伏せた。その上を轟然たる破壊音と突風と目も開けられない埃とが舞っていった。そして額はことごとく落ち、ふだんは開かない襖や戸まで吹き飛んだ。

爆音はふたたび大きくなってやがて遠のいていった。

我に返った子どもたちは、いっせいに泣き出した。身一つで裏庭に避難することを命じて、それを見届けると、私は他の宿舎が気になり、道を下っていった。あいにくこの時は分団長、次席も帰郷で留守。すると戸板に寝かされた女の人が担がれて登ってきた。すでに死んでいるとしか見えないが、医師の手当てを求めて登っていく。あと3人残してあるが、これは即死とのこと。「重いから手を貸せ」というので少し手伝い、さらに各寮を見て回るといずこも大変な騒ぎ。様相は下に行くほどひどい。ついに吉川寮の前に出た。

子どもたちが道路いっぱいにあふれて騒いでいる中に、A先生が放心したように立っている。「どうした」と聞くと、彼はだまって二階を指す。急いで二階へあがってみて驚いた。布団から日用品の一切が散乱する中に、異様な臭気が漂い、血や肉片が飛び散った向こうに、ざくろのように真赤な口をあけたものが見えた。それが米須清博君の頭部であった。

米須君は5年生男子のため、午前10時過ぎ、米を取りに下った。リュックいっぱい、米を詰めてもらおうとさすがに重い。多くの子どもたちは途中何度も休み、道端を流れる水で手や頭を冷やしながらか登る。級長の吉永君、そしてこの米須君は大変まじめな子どもで、途中ほとんど休むこともなく、真っ先に登りきり、寮に着くと、リュックを寮母に預けて二階に上がり、好きな将棋を2人でさしていた。

その時に爆弾が落ちた。ちょうど吉川寮の裏を流れている川の向こうの岸壁に一発、これは50キロ爆弾であったが、細い道と川に沿って弾片と爆風が数百メートルにわたって飛んだ。そして吉川寮の床の間にうず高く積み上げた布団の山を吹き飛ばし、その一片が米須君の後頭部をえぐりとり、一片は腿の付け根に突き刺さった。彼は右手に駒を握ったままうつ伏せに倒れた。相手の吉浜君は返り血を浴びたけれども、傷一つ受けなかったのは、奇跡をいうほかない。将棋盤一枚が生死の境であった。爆弾は7発落ちたが、残りはすべて岸壁の向こうに落ちた。後になって行ってみると、いずれも大きな穴があき、杉の大木が鋭い刃物で切り取られたようにえぐられたり、倒されたりしていた。

町じゅう騒然となった。各寮の寮母に動員をかけて、吉川寮の片付けに入った。なにしろ二階は足の踏み場もない。ことに肉片があちこちに飛び散っているので、はしでその一つひとつを丁寧に拾い上げた。異臭に耐えられず、鼻をハンカチで覆うものがいた。すると、駐在の巡査は聞こえよがしに自分の子の肉だったらそうはすまい、と言った。明らかにこの事件を境に、教師、寮母に対する目は、厳しくなった。警報発令中、二階で将棋をさせているとは、というわけである。幸い、米須君の顔は残った。頭は疎開していた女医が包帯を巻いて整え、布団の上に丁寧に寝かせた。

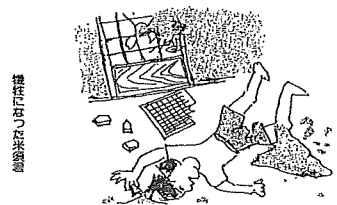
後片付けと平行して、ある先生を学校や川崎市の教育部へ走らせた。ある先生を四値須君の家へ走らせた。これが一番つらい使者であった。両親は原町田あたりに疎開しているというが、さらに再疎開したとも言う。続々と見舞いにくる他校の校長、分団長、町当局から「分団長は？通夜や葬式はどうするのか？」と聞かれたが、私1人ではどうにもならない。致し方なく、私1人でも今夜、通夜をする、と言明した。

さて、そこで坊さん探しが始まった。この近所に寺がない。山腹にかすかに灯りが見える大山寺にはどうかと思って、下山してきた人に聞いても、もはや一人いなかったという。

後片付けもどうやらすんだ夜、私は這子坂まで下ると左手に寺があるという地元の話の頼りに、作業員一人を連れて山を下った。あいにく雨になり、提灯で足元を照らしながら下る山道は歩きにくかった。ついに下駄の鼻緒が切れ、はだしになった。やっと寺を見つけて請うと、年老いた人が出てきた。「ああ、山に爆弾が落ち、子どもさんが亡くなったという話しは聞きましたが、おたくの学校でしたか。私は老齢で、すでに隠居の身ですが、こんな夜更けに先生がはだしにまでなって雨の中おいでくださった以上、仏に仕える身として途中で倒れてでもまいりましょう」と快諾してくださった。そんなわけで通夜が始まったのは午後10時を過ぎていたかと思う。このころになると学校の首脳部とも連絡がとれて集まっていた。米須君の父親も見えた。

暗い、長い一夜が明けた。20日の午後から告别式が始まった。すっかり整えられた二階の奥に米須君を寝かせ、その左右に市教育部、町当局、各学校長らが威儀を正して座り、読経が始まった。その時に米須君のお母さんが飛び込んできた。階段を音をたてて駆け上がると、皆があっけにとられて見ている中を、いきなり正面の我が子に近づき、抱きかかえるようにして頭をさすり、「痛かったろう、痛かったろう」と号泣した。そしてその冷たい唇に乳房を出して含ませるのであった。生き延びてもらうために疎開させた、その疎開先で、このようなことになるうとは誰が予測しえたであろうか。私はああこれで米須君は浮かばれる、百の読経よりこの母親の乳房で彼は仏になれる、と思うと涙が流れてしかたなかった。A先生も涙で顔をぬらしていた。

式が終わると、リヤカーを借りて近所から薪を少しずつ提出してもらうために歩いた。古いトタンも探し出して、穴を開けた。夕方になって遺体は山を下った。沿道には見送る人も多かった。這子坂を過ぎると、



「天気であった。ひばりがのどかに麦右手の広い畑の中に樹木で囲まれた動物焼却場があった。そこで一晩かけて荼毘にふ」と信じていた大山町の人たちは、落した。その悲しい煙と火をみつめるものは「舎がこぞって裏山に防空壕を掘り始めたのは、その後である。私も午後授業が終わると、鋤（すき）を借りて裏山に挑んだ。

（当時、旭町国民学校訓導）

[疎開の宿から] かんき楼旅館 内海トキエ

川崎市平間国民学校の子どもたちが、谷あい的大山町では一番奥の私ども4軒に入ったのは昭和19年の真夏、農村に囲まれているとはいえ、食糧も一段と厳しくなっていました。来た子は皆良い子たちばかりでした。ですから立派なご主人と奥様になられて時折訪ねてこられる疎開の方にお会いできると、まあ良かったと思います。

その頃の私は、応召した主人の留守を姉と2人で守る、嫁いで6年目の花嫁でしたが、今、孫が9人のおばあさんです。大山町全部で電話は町役場他十数本だけで、私どもの坂本町は家の一本きりですから、平間校の本部になり、滝沢先生と給食の小島さんがおられました。

いろいろ思い出をたどると、つらいことばかりだったのに、今はどれもなつかしい体験だったように思えるのが不思議です。

1. 空襲警報・・・警防団本部からの警報電話を受けて家の前の石段中ほどの杉の木にかけた半鐘を打つのが私の役目で、雨の日も雪の日も夢中でジャンジ

ヤンたたくと警防団の人がかけつけます。

2. 薪取り・・・先生も生徒も全員で私の案内で裏山へ薪を取りに行きました。杉の枯れ枝など拾い集めて山道を滑ったり転んだり、もてるだけかかえて帰りましたが、家の生徒さんたちはとても薪取りの名人で助かりました。
3. 肥やし汲み・・・どんどんたまる肥やしの始末くらい困ることはありません。さあ今日はやろうか、滝沢先生が声をかけると、小島さんもハイッと思い切って返事をされます。なれない手つきで汲み取って、一つの肥え桶にちぎり木を通してよちよちと裏山の捨て穴まで行ってもらいました。これが一番お気の毒ながら、助かりました。
4. 整頓棚・・・先生から室内に整頓棚を作らせてと申し出があって、ちょうど出征中の主人が休暇で帰省したので話すと「ああ、いいようにさせな。戦争に勝てばどうにでもなるよ」というのでどうぞご自由にと返事をしたところ、やがて床の間もはめもそこらじゅう不細工な整頓棚になってしまって、その次帰省した主人もさすがにびっくりしていましたっけ。
5. つまみ食い・・・人参を薄く千切りにして干すと飛び切り甘いので、日当たりに干しておくとそのと忍びよった子が一つ二つ摘んだ、誰もとても声をかけて驚かす気もしないので、黙ってこちらが気づかれないようにしてあげていた。でも同じようなことで先生や宿舎へ尻を持ってくる家もあって子どもたちに悲しい思いをさせたでしょう。心ないことしたねえ。
6. 七五三参りの後をぞろぞろついていった女の子・・・宿舎の中の根岸家の今の奥さんが七五三お宮参りの時、時節柄元禄袖にモンペの祝い着だったのに、疎開の子どもたちが大勢ぞろぞろ後をおってあがって行きました。

その気持ち、わかりますよ、わかりますよ。

とりとめもなく書きました。お気にさわるところがあったらお許してください。なぜなら今思えばみんななつかしい思い出なのですから。そしてたったの1年足らずだったのに、ずいぶん長くいられたようにも思えます。

《 現在の平塚市へ疎開した子どももいました・・・ 》

[豊田村での生活]

本條 陽子

集団疎開をした友達と当時の思い出話をすると、必ず話題になるのが寒さと、空腹と、淋しさ、そしてしらみ退治のこと等です。

その頃新町国民学校の6年生だった私は、中郡豊田村青雲寺へ集団疎開をしました。終戦から40年の年月が過ぎた今でも手の甲には、そのときの生活を思い起こさせる霜焼けの跡が残っています。

お寺での生活は、朝6時半起床、お掃除、ラジオ体操そしてそれが終わると「わっしょい、わっしょい」と掛け声も勇ましく、田んぼの畔道を走って神社まで行

き、お参りをして帰る、それが朝の日課でした。

霜焼けの手に冬の風は冷たく針で刺されるように痛く感じたものでした。そんな手を、朝食の味噌汁のお椀を持って一生けんめいに暖めました。なにしろ冬というのに火鉢の中には、火の気もなかったのです。お寺の本堂は広い板の間です。特に雪の多かったあの年は、障子の隙間から雪が板の間に舞い込んできたことも少なくありませんでした。夜になれば雨戸を閉めてもらいましたが、それでも隙間風はおかまいなく入ってきます。手足が冷えて、なかなか眠れないこともたびたびでした。そんな時には、父母のことや、家のことを思い出して涙を流したものでした。

冷たい風が吹きさらす井戸端で洗濯することも、とても辛いことでした。これ等は霜焼けを悪化させましたがそれに加えて栄養が十分とれなかったことも原因でした。

午前中は、村の学校の教室を借りて勉強しました。午後は時には農家へ手伝いに行きました。稲刈りの仕事も脱穀の仕事も覚えまして、落穂ひろいも麦ふみも経験しました。どれもこれも初めてのことでした。ですから仕事は、村の子ども程うまくできないのに農家の方々は、心から私達を仲間に入れてくださいました。作業の後には「疎開の子は腹を空かしているだろう。」と言ってふかし芋をどっさり食べさせてくれたり、「後で食べなさい」と言って、干し芋を包んでくれたりしました。そんな心づかいが私たちにとって何よりのすくいでした。

夕方には4、5人ずつに分かれて近所の家へお風呂をもらいに行きました。風呂上がりには、家族の仲間に入れてもらい、お話をして帰ることもありました。でも暗い外に出ると、家族と一緒にいる村の子どもがうらやましく家が恋しくなったものです。6年生だった私達でさえこんなだったのです。今、考えてみると、3つ年下の3年生は、どんなにつらく心細かったでしょう。疎開の生活で身につけた事は、耐えるということでした。また、思いやりの心のありがたさを知ったことでした。

今でも我慢強さは残っているつもりです。

集団疎開は貴重な体験でした。しかし、二度とあつてはならないことです。

(当時、6年生)